Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（看護学）
報告番号	甲第１８３９号
学位記番号	第２３号
氏名	伊藤 美智子
授与年月日	令和3年 3月 24日
学位論文の題名	救急・集中領域で終末期を迎える患者の看護に関する教育の検討 (Consideration of education for Nursing to Dying Patients at the Critical Care)
論文審査担当者	主査： 明石 惠子 副査： 山田 紀代美，樋口 倫代，安東 由佳子

氏　　名：	伊藤　美智子
学 位 の 種 類：	博士（看護学）
学 位 記 番 号：	第 23 号
学位授与年月日：	令和 3 年 3 月 24 日
学位授与の要件：	学位規程第４条第１項該当
論　文　題　目：	救急・集中領域で終末期を迎える患者の看護に関する教育の検討 Consideration of education for Nursing to Dying Patients at the Critical Care
論文審査委員：	主査　教授　明石　惠子 副査　教授　山田　紀代美 副査　教授　樋口　倫代 副査　教授　安東　由佳子

博士論文要旨

Ⅰ.はじめに

救急・集中領域は救命や回復を目的とする場所であるが、そこで死亡する患者も少なくない。そのため救急・集中領域に勤務する看護師は、終末期看護に対し困難感を持っているとされる。その困難感を軽減する方法の一つとして、対象者のレディネスや背景を考慮した終末期に関する教育が必要と考えた。また、最近は学会等による終末期看護の研修が開催されているため、病院内で活用できる教育案を作成したいと考えた。そこで本研究は、救急・集中領域の看護師に必要な教育内容とその方法を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ.救急・集中領域で終末期を迎える患者をケアする医療者への教育についての文献検討

1.目的

救急・集中領域における終末期医療の教育について、国内外の文献からその実態と効果を明らかにする。

2.方法

医学中央雑誌 WEB 版および CINAHL で 2000 年から 2015 年までの救急・集中領域での終末期に関する教育の文献検索を行った。看護師のみを対象とした文献が少なかったため、他の医療職者や医療系の学生を対象とした文献も検索した。その結果、救急・集中領域における終末期に関する教育を扱った 7 文献を分析対象とした。

3.結果および考察

分析対象とした 7 文献はすべて国外文献であった。

救急・集中領域の終末期教育では職種を問わずシミュレーション教育が多く用いられており、その効果が確認されていた。また、反復学習が有効であることが明らかになった。しかし、看護師を対象とした包括的な終末期の教育の研究は見当たらず、救急・集中領域における終末期看護の教育についての検討の必要性が示唆された。

Ⅲ.看護師の死生観とターミナルケア態度に関連する要因

1.目的

看護師の死生観とターミナルケア態度について属性、個人の死に関する経験、看護師としての死に関する経験との関連を明らかにする。

2.方法

特定機能病院に勤務する看護師を対象として自記式質問紙調査を行った。属性・個人の死に関する経験・看護師としての死に関する経験・死生観・ターミナルケア態度を調査し、死生観尺度得点およびターミナルケア態度尺度得点と属性や死に関する経験との関連を分析した。

3.結果および考察

看護師 894 名に質問紙を配布し、624 名（回収率 69.8%）から返送があった。回答に欠損のあった者を除く 522 名（有効回答率 58.4%）を分析対象とした。

看護師の死生観尺度は、看護師経験 3-5 年は 15-20 年よりも有意に＜死からの回避＞の得点が高かった。また、死に関する経験のある者は＜死からの回避＞の得点が低く、＜死への関心＞が高かった。

ターミナルケア態度尺度得点は、看護師経験が長いほど得点が高くなる傾向があり、身近な人との死別経験や看護師として終末期ケアの実施経験がある者

の方が高かった。また、看取った患者の概数が多いほど得点が高くなる傾向があった。

経験年数によって変化するターミナルケア態度の形成には教育が関連すると考えられ、キャリア段階に応じた終末期看護に関する教育の内容や方法を検討する必要があると考えた。

Ⅳ.各キャリア段階にある救急・集中領域に勤務する看護師の終末期に関する学習ニーズの分析

1.目的

キャリア段階に応じた終末期看護の教育を検討するために、救急・集中領域に勤務する各キャリアの看護師が終末期看護に関する学習においてどのようなニーズを持っているのかを明らかにする。

2.方法

救急・集中治療領域に勤務する看護師を対象として、救急・集中領域で終末期を迎える患者の看護に関する学習について半構造的面接を実施した。面接内容から逐語録を作成し、キャリア段階別に質的記述的に分析した。なお、キャリア段階は、新卒で配属された看護師経験 1 から 2 年目の者を新人看護師、3 から 5 年目の者を若手看護師、他部署の経験を問わず救急・集中領域での経験が 6 年以上の者を中堅看護師とした。

3.結果および考察

研究協力者は新人看護師 6 名、若手看護師 8 名、中堅看護師 6 名であった。分析の結果、各キャリアにおける学習内容と学習方法に関するニーズが明らかになった。

新人看護師では、一般的な終末期を押さえた上での学習ニーズや場に応じた家族看護の学習ニーズがあった。また、学習方法として、知識を持って実践学習をしたいというニーズがあった。

若手看護師では、自身が対応に困った経験から、状況に合わせた患者・家族への具体的な看護方法を知りたいという学習ニーズや他の看護師が実践している看護を聞きたいという学習方法のニーズがあった。

中堅看護師では、具体的な看護方法や多職種での関わりを前提とした学習ニーズ、他者との議論を通して自身の看護を深めたいという学習方法のニーズがあった。

Ⅴ.全体考察

以上の結果をもとに、病院内での使用を想定した救急・集中領域のキャリア段階別の教育試案を検討した。最初に新人・若手・中堅看護師における対象者観・教材観・指導観を記述し、最新の知見を活用して、以下の特徴をもつ教育試案とした。

1)新人看護師・若手看護師・中堅看護師の特徴や学習ニーズに基づいて設計した。

2) 新人看護師・若手看護師・中堅看護師の到達目標を決め、それぞれ 4 回の研修を行うこととして各回の行動目標を設定し、それに合わせた学習項目を配置した。

3)学習方法は、講義とグループワーク・ロールプレイ・ケースレポートを組合せ、最終評価にはケースレポートを用いた。

審査結果の要旨

救急医療や集中治療は救命が第一義であるが、救命できない患者も少なくない。また、超高齢社会に伴う多死社会となることが予測され、在宅医療が推進されているが、急変時には救急搬送され集中治療室に入室する患者もいる。そのような患者にケアを行う救急・集中領域の看護師は、終末期を迎える患者への看護に困難感を持っていることが多くの研究で指摘されている。一方、最近、学会等で救急・集中領域の終末期看護に関する研修が実施されるようになったが、その参加は看護師個々の受講意欲に左右されると考えられる。本研究では、救急・集中領域における終末期看護に対する看護師の困難感を軽減するためには、教育が必要であると考え、必要な教育内容とその方法を探り、院内教育で使用できる教育試案を検討した。

第 1 研究では、救急・集中領域の終末期医療の教育に関する文献を検討し、シミュレーション教育や反復学習の有効性を確認した。

第 2 研究では、急性期病院の看護師を対象とする質問紙調査を行った。その結果、看護師の経験年数とターミナルケア態度との関連が明らかになり、キャリア段階に応じた終末期看護に関する教育の内容や方法を検討する必要があると考えられた。

第 3 研究では、キャリア段階に応じた終末期看護の教育を検討するために、救急・集中領域に勤務する新人・若手・中堅の看護師 20 名を対象として、終末期看護に関する学習ニーズについての半構造化面接を行った。質的記述的に分析し、新人・若手・中堅看護師それぞれが学習したい内容や学習方法を明らかにした。

最後にこれらの結果をもとに、最新の知見を活用して、院内での使用を想定した新人看護師・若手看護師・中堅看護師それぞれを対象とする教育試案を作成した。

審査では、第 2 研究で使用した尺度の選択理由、一般病棟と救急・集中領域の看護師の死生観やターミナルケア態度の違い、第 3 研究に協力した看護師の終末期看護に関する教育の実態、研究で得た結果と教育試案との関連、院内教育が必要な理由などが質問された。また、作成した教育試案の位置づけを明らかにするように指摘された。しかし、本研究によって看護師のキャリア段階による終末期看護の学習ニーズの違いが明らかになり、それに基づいて作成された教育試

案は、院内教育に活用可能であることが評価された。今後、教育試案に対する実証研究が望まれる。

以上より、本論文は、本学学位規程に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり，申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査および最終試験に合格と判定した。